

第 41 回土木計画学研究発表会（春大会）：2010. 6. 5～6（名古屋工業大学）

企画セッション討議内容の記録

セッション名：市民参加型計画とまちづくり	
日付： 6月 5日（土）曜日，セッション時間：16:00～17:30、17:45～18:45	
オーガナイザー名（所属）：大島明（国際航業）、森本章倫（宇都宮大学）	
討議内容	<p>（裏面に個別論文の講評を記述できる欄を設けております。必要に応じてお使いください。）</p> <p><b>1. セッションの目的と概要</b></p> <p>本セッションは、これまでの知見から市民参加型計画でまちづくりを進める際の留意点と専門家の立場で参加する我々技術者のあり方について討議し、知見の共有を図ることを目的に開催した。公募の結果 12 編の論文が寄せられ、2 コマを頂き口頭発表（発表 7 分+質疑 5 分=12 分/1 テーマ）を行った。なお、当日のセッション参加者は、大学教員、コンサルタント技術者、学生を含め約 50 名であった。</p> <p><b>2. 討議内容</b></p> <p>市民参加とまちづくりをテーマとして、多様な内容の論文が集まり、積極的な討議が行われた。特に、具体的な事例での報告が多く見られ、質疑においては専門家として現場で苦労した経験談などが紹介された。（討議の概要は各発表者の欄に記載した。）</p> <p>短時間での発表と質疑であったが、質疑・議論を通じて、以下の知見が得られたものとする。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1) まず、地域のことを一番知っている住民からよく話を聞く姿勢が重要</li><li>2) 情報共有の環境づくり、情報格差をなくす努力が必要</li><li>3) 対象を長期的に考え、まちづくりの大きな方向性を共有できるようにすることが必要</li><li>4) これらから、計画プロセス、結果について住民から信頼感のある成果を出す努力が重要</li></ol> <p>また、今後の参加型まちづくりにおいて、以下の課題があると認められた。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1) 専門家の多くは、計画等の段階でかかわるが、アフターケアの仕方が難しい。現状では業務が終わった後、急に地域との関与がなくなるケースが多いが、提案が地域に根ざしていくにはある程度のアフターケアが必要となることがある。専門家のフェードアウトの仕方が課題となる。</li><li>2) 失敗経験の共有化などが重要であるが、論文には記載できないことがたくさんある。 （どのようにして学んでいくか？）</li></ol> <p style="text-align: right;">以上</p>

<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 渡辺 茂樹 (オリエンタルコンサルタンツ)</p> <p>相互的なまちづくりに対して個別計画から入ると問題が発生するので、総合的な視点から入るとよいとの指摘があった。また、「たれば」とどのような方法論なのかについて質問があった。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 松本 好史 (ケー・シー・エス)</p> <p>住民は教育する対象ではなく、地域のことを最も知っているのが住民なので、十分な連携が必要であるとの指摘があった。また行政の前捌きとして、事前に住民意見を吸い上げてから業務に出す必要があるとのコメントがあった。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 江守 央 (日本大学)</p> <p>授業の達成度評価について質問が出され、定性評価がなされているとの回答があった。また教育目標が重要であるとの指摘がなされ、学生がどういった社会で貢献することを想定しているかについて質疑が行われた。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 藤田 智司 (倉敷市)</p> <p>意思決定の権限を住民に渡すと説明されたが、どのような決定権を渡したのかについて質問が出され、住民提案の決定についてとの回答が行われた。また、議会の役割についても質問が出された。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 高橋 富美 (建設技術研究所)</p> <p>発表に対して、「WSに参加しない人の反対でダメになるのは参加者の意見が無駄になったのでは」との指摘があった。また、3回で意見対立が収まった秘訣について質問が出された。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 福本 雅之 (名古屋大学)</p> <p>行政の支援が見られなかった理由について質問が出され、公共交通会議で合意されていないなどの理由が説明された。また商店街や専門家の役割について討議が行われた。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 谷内 久美子 (大阪大学)</p> <p>バス利用者の意見について、利用者の声が広がると良いと思うとのコメントがあった。また、ソーシャルキャピタルと現実的な持続可能性との関連性について、質問があった。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 金城 昌幸 (大阪府都市整備推進センター)</p> <p>質疑では、専門家との協働作業や開発者等に事業センスなどが議論された。また、長期的・地域的な目標設定をしていくことが大切。短期的な利害だけでは続かないということを再認識したとのコメントもいただいた。</p>
<p>(発表番号)            発表者名 (所属) : 伊藤 将司 (福山コンサルタント)</p> <p>「市民の自主的な活動に代表性を持たせているか」との質問に対して、市民の自主的な活動で、維持管理やバリアフリー教室などソフト的な取り組みなどで、特に代表制は担保していないとの回答があった。また、ネットワーク組織論などと組み合わせながら研究していけばよいのではないかとアドバイスがあった。</p>

(発表番号)                    発表者名 (所属) : 藤本 圭太郎 (建設技術研究所)

客観的評価と地域住民の意見からの必要事項との関係について質問があった。また、一定の費用で最大の効果を出すという考え方についての質問には、維持管理のように効果が見えにくい取り組みに対して努力したいとの回答があった。

(発表番号)                    発表者名 (所属) : 久 隆浩 (近畿大学)

役場の組織の中で協働型になった場合、役所の予算はどのように対応していくのかといった質問に対して、「地域に継続的に議論をする場をつくり、政策・施策に反映するシステムをつくりようになっている」との回答があった。

(発表番号)                    発表者名 (所属) : 田中 晃代 (近畿大学)

3回の意見集約ということだが、その3回というのに意味があるかといった質問に対して、「3回を最初から意図ではなかった。議論を進めていくとだいたい3回に集約できた。」との回答があった。